

## 舌の印象と舌診

— 診察室での精度を高める

三谷 和男 三谷ファミリークリニック・京都府立医科大学

舌診を行うときに気をつけなければならないことがある。

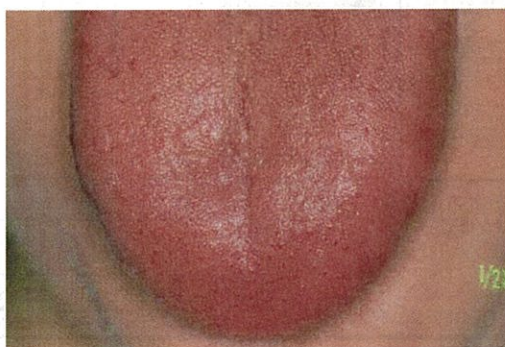
一日の診察が終わった後で舌の写真を再度検討してみると、いろいろなことが「みえてくる」が、診察時には違った印象で受け止めていたことに気づく。私は、舌診を未だに体系化できずに今日に至っている責任を痛感してはいるのだが、どうしてもわずかに数秒の観察時間で「何を」みていくかをシステムティックな共通認識にすることは難しい。この連載では、多角度からの舌の解釈を通して、多くの先生方とそういった意識を共有できれば幸いである。

## 症例1 めまい・ふらつき

○本○美氏の舌所見をみてる（写真1）。

40代の女性で、主訴はめまい・ふらつきである。基本的に舌所見の印象を決定するのは、舌苔の所見で

写真1



ある（Henningの理論：印象を決定する要因について）。じっくりみていただければ、非常に薄い白浄苔が一様に付着している。舌質の色調は軽度暗紅色であるが、瘀斑はない。全般的に「ぼてっ」としており（こういった表現に抵抗を示される方もおられるとは思いますが……）、水滯が背景にあるのがわかる。

さらに茸状乳頭が目立っており、どちらかという血流は豊富と推定される。さらに、乾燥傾向はないので内熱による津液の消耗もないと考えられる。全般的に比較的緊張感に乏しく、なにか元気が出ない、日々だらだらと過ごしている様子がうかがえる。

しかし、診察室での数秒の観察では、水滯に注目される先生なら利水劑（茯苓・朮・沢瀉・滑石・木通・車前子など）、鬱滯ととらえるなら、気の巡り・膈の痞えを重視し、理氣劑（木香・香附子・厚朴・枳実・陳皮・青皮・砂仁など）を選択されるかもしれない。かつて、長濱善夫先生が指摘しておられた経験と直観と類推によって方劑が決定される瞬間である。

しかし、診療が終了して、再度考え直すと、やはりこの方の日常は「ひねもすのたりのたりかな」じゃないか？ それなら大柴胡湯加甘草か。茸状乳頭は目立つが、鬱滯はないと考えると、背景に水滯があるとしても柴胡は不要だから柴苓湯ではなく五苓散か。いや、やはり腹診で胸脇苦満があるが……。

深夜に、あるいは休日に、診察室でみた所見と後で検討する所見の解離に悩むことが多い。

**症例2 胃部不快感・便秘・心窩部痛**

△竹△代氏はどうか。

この方も40代の女性で、主訴は胃部不快感・便秘、ときに差し込むような心窩部痛があり、内視鏡検査では軽度の胃炎と診断されている。症例1に比べるとやや厚い白膩苔が一面に付着し、一部亀裂もみられる(写真2)。舌質には腫大はなく、紅色で舌の先端には瘀斑を認める。紅色舌の病理は舌粘膜固有層の毛細血管の拡張・充血によるものである。

診察室では、白膩苔のみが印象に残り、炎症所見だから清熱涼血あるいは清熱瀉火で三黄瀉心湯・黄連湯あたりだと、瞬時に方剤が決定されてしまう。しかし、はたしてそれがすべてだろうか。瘀斑をどう治療内容に盛り込むか、柴胡・升麻・豆豉・菊花といった清熱剤は不要か？ やはり柴胡剤に駆瘀血剤を兼用するのがベターか？

方剤内容が多岐にわたっていくことを自覚する。

**症例3 胃部不快感・食欲不振・腹痛・下痢**

そして○山△子氏は50代の女性である。

主訴は、△山さんと同様、胃部不快感・食欲不振・腹痛に加え、しばしばの下痢(軽度)である。この方は、舌診の勉強会でも何回か提示させていただいているので、ご記憶の先生もおられるかと思うが(同様に○本さん、△竹さんの写真も提示しているが、おそらく○

山さんの舌ほど印象には残っておられないだろうと推測する)。それこそ「雪が降り積もったような」厚い白苔である(写真3)。舌苔の厚・薄は、糸状乳頭の発育と密接な相関があり、邪の勢いが強くと厚くなり、弱まると薄くなると考えられている。

では○山さんのこの舌はどうか。邪の勢いは強く、清熱剤を第一に考えるべきと判断できる。△竹さんよりも選択の幅は広く、知母・石膏・黄連・黄芩・黄柏・山梔子・大黃・茵陳蒿・竜胆・決明子などを念頭におくことになる。

一方、舌尖は赤く、茸状乳頭の所見が非常に目立つ。これは急性期の所見か？ しかし、かぜなら舌は紅舌以外の所見に乏しいはずだが？ 舌全体は明らかに水滯であり、水の代謝に問題が生じている。消化管からの過度の水分排泄に対する反応ともみることができが……いずれにしても基礎疾患の検証も考えないといけないかもしれない。

診察室では、舌苔の印象が強く残り、舌質の所見は写真を見直してようやく全体像をつかむことができるように思う。脈はやや浮、腹診では心下痞硬の所見を得て、壞証下痢に対する葛根黄連黄芩湯を選択することになる。

印象を決定づける要因を踏まえながら、全体像をつかむトレーニングが求められると考えている。

写真2

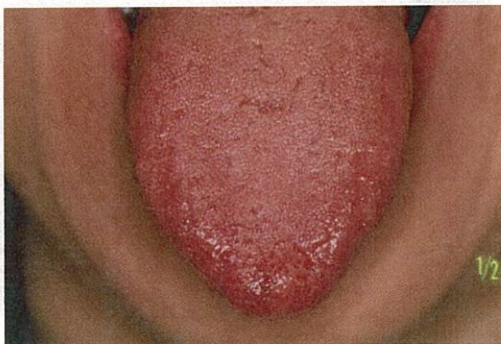


写真3

